

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

国立公文書館	
分類	
	返 赤
配架番号	3 A
	14
	40-2

4117

SHIPPING ADVICE # 10112  
SAC # 17  
TEA # 301

極秘

昭和十三年十二月

近接戦闘兵器  
研究委員  
中支派遣者報告

中支派遣委員

陸軍歩兵中佐 重信吉固  
陸軍歩兵大尉 由良四方吉  
陸軍砲兵大尉 金森義雄

昭一四二六  
由良大尉より受領

国立公文書館	
分類	
配架番号	10-2

めくれず

目次

- 第一 中支那派遣ノ目的及其人名、任務分擔區分
- 第二 派遣委員行動ノ概要
- 第三 増加交付兵器ノ種類並員數
- 第四 増加交付兵器使用ノ概況並之ニ對スル意見
- 第五 現制近接戰鬥兵器ニ關スル意見
- 第六 近接戰鬥兵器裝備改正ニ關スル意見
- 第七 將來ニ對スル意見

近接戰鬥兵器研究委員中支那派遣者報告

第一 中支那派遣の目的、派遣者人名

並ニ其任務分擔區分

増加交付兵器ヲ中支那派遣軍ニ携行  
シ漢口作戰ニ任ズル某師團ニ之ヲ交付  
シ第一線部隊ニ對シテ之カ取扱法ヲ指導  
教育シ以テ戦力ノ増強ヲ圖リ且其使用  
ノ結果ニ鑑ミ實用價值ヲ判定シ以テ此  
種裝備決定上ノ資料ヲ求メ 尚一般近接  
戰鬥兵器ニ關シテモ廣ク其意見ヲ求メ且將



其因テ來ル所ヲ明ニシテ之ニ適正ナル判断ヲ  
加ヘ以テ將來皇軍兵器裝備上ノ参考ニ  
資セントスルニ在リ  
派遣者ノ人名並ニ其任務カ分擔區分附表  
第一ノ如シ

## 第二 派遣者行動ノ概要

内地出發ヨリ歸還迄ノ間ニ於ケル行動ノ概  
要尤ノ如シ

九月三日 天野准尉、東裏曹長ハ携行兵  
器率領者トシテ宇呂出帆

九月六日 重信中佐、由良六尉、金森大尉、  
河野軍曹門司出帆

九月八日 同右 上海上陸

九月十日 同右 南京着

九月十三日 重信中佐以下ノ人員並ニ兵器ハ

第十一軍ニ配屬セラレタルヲ以テ准士官以下ヲシテ兵器ヲ宰領シ船舶ニ依リ九江ニ向ハシメ委員三名ハ飛行機ニ依リ九江ニ至ル  
天野准尉以下兵器ヲ宰領シ九江到着

九月十九日

九月二十三日  
重信中佐以下ノ人員及兵器ハ第二十七師團ニ配屬ヲ命ゼラレタルモ九月十九日以来連續ノ降雨ニテ自動車ノ運行ヲ停止セラレ漸クニ

十三日出發横港灣ニ於テ師團ニ追及ス

自九月二十三日  
至十月二十日

此間師團ハ殆ト停止スルコトナク陣地攻撃及追撃ヲ續行セリ  
委員ハ師團司令部ニ隸屬シ本作戦間屢々幕僚ニ意見ヲ開陳シテ兵器使用ノ資ニ供シ機會ヲ得ル毎ニ兵器ヲ第一線部隊ニ交付シ其取扱ニ関シ指導ヲナシ且第一線ニ進出シテ使用ノ景況ヲ視

察シ或ハ第一線部隊ノ意見ヲ現  
地ニ於テ聴取シ十一月九日通城ニ進  
入シ追撃ヲ中止警備ノ状態ニ入ル  
マ第一線各部隊或ハ後方部隊ヲ  
歴訪シテ各種意見ヲ聴取シタリ  
此間ニ於ケル作戰経過ノ概要附  
圖ノ如シ

十一月二十日

十一月十八日附第二十七師團ノ配属  
ヲ解カレタルヲ以テ二十一日通城出發  
第十一軍司令部(武昌)ニ歸還ス

十一月三十日

十一月二十一日武昌到着後残務救正  
理ニ任ジ三十日武昌出發南京  
中支那派遣軍司令部ニ歸還ス

十二月九日

金森大尉、天野准尉、東裏准尉  
ノ三名ハ第二十七師團ノ増加交  
付兵器返納ニ伴ヒ第十一軍兵  
器部ニ引継スル爲武昌ハ派遣セ  
ラル

十二月十二日

右人員南京歸還

十二月十四日

南京出發各原所屬ニ復歸ス

### 第三 増加交付兵器ノ種類並員數

附表第二ニ示スガ如シ

### 第四 増加交付兵器使用ノ概況並之ニ對スル意見

一、増加交付兵器ノ種類ト作戰地ノ地形並ニ戰鬥ノ性質トノ關係

今次中支那派遣軍ニ携行セシ増加交付兵器ハ大部分平坦地ニ於ケル堅固ナル陣地ニ對スル攻撃特ニ突撃及陣内戰ヲ對象ト

シ主トシテ之ニ適スル如ク考察セラレタルモノナリ。然ルニ漢口作戰ニ於ケル戰場全般ノ地形ハ殆ト峻峻ナル山地ニシテ加フルニ配屬セラレタル第二十七師團方面ノ戰鬥ハ追撃ノ連續トモ云フベキ運動戰ナリシ爲此種兵器ガ戰場ノ實相ト合致セザルモノ歎カラザリシノミナラズ輸送常ニ第一線ニ追隨シ難ク又一面各部隊ハ絶エズ行動シテ停止スルコトナク爲ニ十分ナル教育ヲナスノ余裕ヲ有セズ又該師團ガ平時編制ニシテ兵力過

少ナルニ更ニ戦斗経過ニ伴ヒ兵力減耗シ  
固有兵器スラ後方ニ残置預托スル状況  
ニシテ携行ノ余力ナク從テ全然使用シ得  
ザリシモノ或ハ使用シタルモノモ適時適切ニ  
之等ノ兵器ノ性能ヲ遺憾ナク發揮シテ戦  
力ヲ増強スルノ域ニ到達セシメ得ザリシモノ  
アル等爲ニ所期ノ目的ヲ十二分ニ達成シ得  
ザリシハ甚ダ遺憾トスル處ナリ  
作戰地一般ノ地形並ニ戦斗ノ状況附圖  
ノ如シ

ニ使用ノ景況並ニ所見

使用ノ概況附表第三ノ如ク尚細部ノ事

項ヲ示セバ尤ノ如シ

(一) 實用ニ供セシ兵器

ノ試製小迫撃砲

同 榴 彈

所 見

本砲本來ノ用法タル堅陣ニ對スル奇  
襲迅雷射撃ハ之ヲ實施施シ得ズ



部隊ノ使用稍々大隊砲的用法ニ偏シタルヲ以テ的確ナル判決ヲ下シ得ズ

### 實用ノ景況並ニ成果

イ陽新鎮附近ニ於テ鈴木支隊(170)ノ歩兵第五十四聯隊ノ速射砲中隊ノ一小隊ヲ小迫撃砲小队(二門)ニ改編シ慈口鎮―通山―楠林橋―白霓橋道ニ沿フ地區ノ戰鬥ニ使用ス就中慈口鎮及楠

林橋西南方地區ニ於ケル戰鬥ニ於テ其效果ヲ齎セリ即チ敵陣地ニ接近セル時機ニ於テハ歩兵最前線ノ更ニ前方ニ進出シテ自隊ノ損害ヲ願ルコトナク歩兵ノ突撃ヲ支援シ以テ敵陣地奪取ヲ容易ナラシメタリ然レドモ右ノ地形ハ平地若ハ緩傾斜地ニシテ他ハ悉ク突兀タル山地ノ重疊地帯ニシテ谷間ノ間隔四百米以内ノモノハ稀



有ニシテ常ニ射程外ニ在リ側防  
火器ノ制壓時宜ニ適セザルコト屢  
ナリ此場合却テ重擲彈筒ガ效  
果ヲ擧ゲタルカ如キ現象ヲ生ジタリ  
而シテ一旦斜面ニ入ルヤ傾斜急峻  
ナルヲ以テ協力意ノ如クナラザリシコト  
多シ

又最大射程四〇〇米ナルヲ以テ火力  
發揚以前ニ徒ラニ損害ヲ受クルコト多  
シ

口彈丸ノ效力ノ偉大ナル矣ニ關シテハ  
異論ナキモ藥筒ノ吸濕ニ因ル不發  
(約30%)尠シナラザルハ彈藥携行量  
ノ多キヲ望ミ得ザル本砲ニ於テ忍ビ  
得ザル所ナリトス

又彈藥ノ不發防止ニ關シ研究ス  
ルト共ニ要スレバ藥筒ヲ隨時交換  
シ得ル如ク改良スルヲ可トス

ハ編成人員ハ分隊長一砲手二  
彈藥手五ニシテ彈藥手ハ一彈藥

箱（三發入）ヲ携行セリ（連續セル山地ノ運搬ニハ一人一箱ハ適度ナリ）而シテ他ノ彈藥ハ馱馬ニテ運搬セシモ險難ナル地形ニ於テハ適時補充スルハ困難ナリ此ノ如キ場合ヲ顧慮シ更ニ彈藥手ヲ増加スルノ要アリ

九六式輕機関銃（眼鏡付）

### 所見

十一年式輕機関銃ニ比シ目標ノ確認携行ノ便並ニ故障ノ發生極メテ尠キ等

ノ点ニ於テ優秀ナリ

目標ノ目視困難ナルヲ常態トスル戰場ニ於テ眼鏡ハ欠クベカラザルモノトス

### 實用ノ景況並ニ成果

一、支駐歩兵第一、第二、兩聯隊ニ各ハ銃宛支給セシモ何レモ該兵器使用ノ經驗アリテ信賴ノ度高ク何等著レキ缺點ヲ認メズ

二、射手ニシテ眼鏡ノ不要ヲ唱フルモノ若干アルモ此等ハ未ダ眼鏡ノ使用ニ慣

熟セザル結果ニシテ幹部ノ指導ト相俟チ一〇〇〇米附近ニ於テ克ク目標ヲ確認シ多大ノ效果ヲ擧ケタル戦例アリ

ハ彈藥ハ當初④彈(減裝、無起縁)ヲ使用シ爾後普通彈ヲ流用セシモ何等故障ノ認ムベキモノナシ

ニ彈倉ハ一銃ニ付一〇個支給セシモ置忘レ等ノ虞ナク且某一時機ノ發射彈四五〇發ニ及ビタルニ填實補充ニ支障ヲ

来シタルコトナシ

水脚ノ基部ノ蟻部弱ク射撃ノ繼續ニ伴ヒ弛緩動搖ノ虞アリ又岩石若ハ氷上ニ於テハ滑動反跳スルヲ以テ脚ノ下方ニ踵孔ヲ必要トシ且脚ノ開キ狭キヲ以テ安定悪シ等ノ意見アリ  
研究ヲ要ス

### 3. 試製機關短銃

所見

陣内戦、陣地確保、逆襲阻止並ニ自衛  
用トシテ價値アルモノト認ム

實用ノ景況並ニ成果

イ、支駐歩兵第二聯隊ニ六銃支給シ、實  
用セシメタルニ敵陣地占領後敵ノ  
即時逆襲ニ對シ「腰ダメ」射撃ヲ以  
テ有效ニ阻止シ得タル戦例アリ、然レ  
ドモ配當彈藥僅少ナリシヲ以テ大ナル  
成果ヲ擧ゲ得ガリシハ遺憾ナリ

ロ、各兵科ノ一部ニ射撃ヲ供覧セシメタ  
ルニ異口同音ニ自衛用トシテ價値アル  
ヲ認メ之ガ裝備ヲ渴望シ居レリ

試製輕量手榴彈

所見

甲、乙共ニ輕量ニシテ携行並ニ投擲ニ便  
ナルヲ以テ特ニ攻撃用トシテ價値アルモノト  
認ム

但左ノ欠陥ハ速ニ改善スルヲ要ス



實用ノ景況並ニ成果

イ 支駐歩兵第一、第二兩聯隊ニ各二ロロ宛支給セシニ兵ハ何レモ携行ニ便ナルヲ以テ有效ニ之ヲ使用セリ

但 甲ニアリテハ信管套部及發條等ノ離脱アリ 又夜間ハ發火後噴氣孔ヨリ出ヅル火光ノため破裂前敵ヲシテ危險區域外ニ離脱セシムル虞アリ(現制九一式ノ信管モ同一ノ缺陷アリ)

乙ニ在リテハ投擲ニ方リ糸ノ切断スルモノ及 鑲ノ指ヨリ離脱スルモノアリ

緊要ナル時機ニ携行数少キ之等手榴彈ノ不發ハ兵ニ對シテ著シク失望ノ念ヲ抱カシムルモノナリ

ロ 投擲時以後ニ發火スルガ如キ機構ニアラザレバ安全感ヲ阻害スルカ如キ懸念ハ殆ド無ク又強テ片手ノミニテ操作スルヲ要セズ 要ハ如上ノ如キ不發ノ缺陷ヲ修正シ發火容易且確實ナル

モノタラシムルニ在リ

ハ發射あか筒

所見

集團的用法ノミナラス第一線部隊自  
ラ行フ局部的の使用ニ於テモ極メテ有效  
ナルモノト認ム尚射程ヲ二乃至三〇〇米  
迄延長シ得ハ更ニ有利ナリ

實用ノ景況並ニ成果

支駐歩兵第一、第二、第三ノ各聯隊ニ二〇〇

宛支給ス

幹部ノ運用並ニ指導ニ依リ差異アル  
モ最モ有效ニ使用セラレタル兵器ノ一ナ  
リ

今次作戰ニ於テハ地形ノ關係上集  
團的の用法困難ニシテ第一線部隊自  
ラ行フ局部的の使用ニ終始セリ此ノ如  
キ用法ニ於テハ普通あか筒ニ比シ携行  
ニ便ニシテ風向ニ因リ使用ノ制限ヲ受  
クルコト少ク敵火ニ因ル損害モ亦僅



少ナリ（敵ハ發煙位置ヲ目標トス）又  
彈道ノ高度ヲ利用シ比高アル敵陣  
地内ニ打上クルコトヲ得ル等其利益甚  
少ナラザリキ  
或ハ急峻ナル斜面ノ突撃直前之ヲ  
使用シテ「チェック」輕機等ヲ放置シタ  
ル儘敵ヲ潰走セシメ或山頂占領部  
隊ガ敵ノ逆襲部隊ノ後方ニ投擲シ  
テ退路ヲ遮断シ敵ガ退却ニ方リ吸毒  
シテ苦悶シアルヲ射撃及白兵ヲ以テ

殲滅シタル等敵ニ打撃ヲ與ヘタル戰例  
尠カラス部隊ハ更ニ補充ヲ要求スル等  
之ガ價値ヲ十分認識スルニ至レリ

6. 重擲彈筒用催淚彈

所見

突撃陣内戰等ニ奇襲的ニ使用セバ效  
果アルモノト認ムルモ一般裝備トシテハ必要  
ナカラシ

實用ノ景況並ニ成果

支那步兵第一第二兩聯隊ニ一ロ宛支給ス

突撃手前及夜襲時使用シ相當ノ效果ヲ  
拳ゲタルモ赤筒ニ比シ遜色アリ

但此種手榴彈ヲ手投用トシテ送襲  
阻止ニ使用シ效果ヲ拳ゲタル戦例アリ

(三) 實用ニ供シ得ザリシ兵器

ノ地雷探知機

所見

本機ハ實用ノ價値少シ更ニ輕量小型  
ニシテ内部ノ構造堅牢且調整使用  
簡便ナルナルモノヲ考察スルヲ要ス

地雷探知ノ狀況

長距離ノ輸送ニ依リ部隊ニ交付  
前既ニ一機ハ機能障害ヲ起シ調  
整ニ時間ヲ要シ調整後ノ機能  
良好ナラズ 工兵第二十七聯隊ニ二  
機支給セシモ戰鬥經過中ニ地雷  
ニ遭遇セシハ稀ニシテ偶々地雷地  
帯アルモ掘土明瞭探知容易ニシ  
テ簡易ニ掘土シ得タル爲遂ニ本  
機使用ノ機會ナカリシハ遺憾ナリ

夜間ニ在リテハ探知機ヲ必要トスル  
コトアラシモ現在ノモノニテハ携行使用  
ニ不便ニシテ實用ノ價值乏シトノ意  
見ナリ

### 爆薬投擲機

#### 所見

此種兵器ハ工兵自ラ敵ヲ制壓シツ  
ツ作業ヲ敢行スルヲ要スル場合ニ於テハ  
必要ナランモ運搬ノ容易、破片效力

ノ増大、精度、良好等ノ諸点ヨリ觀  
察スルトキハ小迫撃砲ヲ装備スル  
ヲ可トス

#### 實用ノ景況並ニ成果

工兵第二十七聯隊ハ既ニ支給セラレ  
アリシヲ以テ携行セル兵器ハ支給セズ  
敵ノ送襲ニ方リ射撃ヲ以テ潰走セ  
シメタル一戦例アルモ其他使用セシコトナシ  
既往ノ經驗ニ徴スルニ陣地攻撃等ニ方  
リ最初ノ使用ニ際シテハ效果アルモ敵ニシ

テ一旦ト真ノ效果ヲ認識セバ之ガ使用ノ效果  
ヲ期待シ得ガル機アリトノ意見ナリ

### 3. 試製内筒防楯

所見

地形ニヨリ著シク制限ヲ受クルヲ以テ火  
ナル效果ヲ期待シ得ガルモノト認ム

### 4. 改修三八式歩兵銃

所見

現制三八式歩兵銃ノ過長ナルハ何人ト雖モ

之ヲ認ムル所ニシテ更ニ射撃精度及白  
兵ニ就キ短小銃ノ研究ヲ必要トス

### 5. 試製九八式柄付手榴彈

所見

輕量手榴彈ニ比シ携行不便ナル爲攻  
撃手用トシテハ不利ナルヲ以テ制式ト爲スノ  
要更ニ無キモノト認ム

### 6. 試製發射發煙筒及重擲彈筒用試製 發煙筒

所見

本作戦間ニ在リテハ赤筒ノ使用ヲ重視  
シタル爲此種發煙筒ヲ使用セザリシ  
モ發煙班ノ推進、側防火器、目潰等  
ノ爲ニハ有效ナルモノト認ム

然レドモ兩種發煙筒ハ目的同一ニシテ  
單ニ射程上ニ差異アルノミナルヲ以テ彈藥  
統制上試製發射發煙筒ノ射程ヲ  
極力増大シ軍擲用ヲ廢止スルヲ適  
當ト認ム

### 久試製重機関銃防楯

所見

今次作戦ノ經驗ニ依ルニ重機関銃手  
ノ損傷ハ陣地進入及変換ノ動作中ニ  
多キガ如シ此点ヨリ考フルトキハ運動  
戰ニハ必ずシモ必要ナラズト認ムルモ對陣  
状態ニ於テハ絶對ニ必要ナルベキヲ以テ  
銃ノ属品トシテ之ヲ認メ必要ニ應ジ  
使用シ得ル如ク整備スルヲ適當ト認ム  
今次作戦間ハ三脚架ニ防楯溝ヲ



有スルモノ稀ナリシト追撃ノ戦況多ク  
且地形嶮難ナリシ為負携量ノ軽減ヲ  
第一トシ遂ニ實用ニ供シ得ザリシハ遺憾  
ナリ

8. 試製九八式重防楯及同軽防楯

所見

個人負携量ノ軽減ヲ見地ヨリ運動  
戦ニ在リテハ必要ナシ 對陣状態ニ  
在リテハ必要大ナルベキヲ以テ増加装備ト  
シテ整備スルヲ適當ト認ム

但此ノ場合ニ在リテハ長距離携行ハ  
不可能ナルヲ以テ一時期使用セバ一  
地ニ残置シ後方部隊ヲ以テ之ヲ携行スル  
如ク輸送機関ヲ附スルノ要アリ

9. 試製重鐵帽

所見

甲、乙共ニ陣地戦等ノ如キ場合増加  
装備トシテ適當ナルモノト認ム

10. 試製壕内信號機



所見

運動戦ニ於テハ其必要ヲ認メズ陣  
地戦等ノ如キ場合第一線部隊間ノ  
通信連絡用トシテ價值アルモノト認ム  
小反射鏡

所見

至近距離ニ於ケル第一線分隊監  
視用トシテ價值アルモノト認ム  
及手投用催涙彈

所見

陣地確保並逆襲阻止等ノ爲奇  
襲的ニ使用セバ價值アルモノト認ムルモ  
一般裝備トシテハ必要ナカラシ

及四一式山砲火焰彈

所見

住民地、叢等ヲ火焰化セシメ敵ノ存在  
ヲ許サザルニ至ラシムルノ效果アリ  
今次作戦ニ於テ第九師團九四式山  
砲ヲ以テ頑強ニ抵抗セル竹林内ノ

重機ニ對シ火焰彈ヲ發射シ竹林ヲ  
燒失セシメ之ヲ撲滅シ得タル戰例アリ

### 第五、現制近接戰鬥兵器ニ關スル意見

#### 火 砲

一、九二式歩兵砲ハ現制ノモノニ多少ノ修正ヲ施シ  
且教育ヲ徹底セシムレバ最適ノ大隊砲ニシテ  
砲種ノ改正ハ毫モ其必要ヲ認めズ

#### 理 由

(一) 大隊砲ニハ平曲兩用ノ性能ヲ必要トス 山地、  
住民地等ノ戰鬥ニ於テ曲射ノ必要ナルハ既  
往、各戰場ニ於テ十分體驗セシ所ナルモ平

射モ亦絶對ニ必要ナリ即チ堅固ニ設備セル陣地ノ攻撃ニ於テ掩蓋銃眼ヲ有スル敵ノ機関銃ヲ破壊スル爲夜暗ヲ利用シニ三百米ノ距離ニ近接シテ掩体ヲ構築シ黎明時ニ於テ正確ナル銃眼破壊射撃ヲナシ成功シタル戰例多シ之カ爲速射砲ハ威力乏シク又聯隊砲ハ形体大ニ過ギ重量大ニシテ企圖ヲ秘匿シテ十分ナル準備ヲナスニ適セズ是非共之ヲ大隊砲ニ求めザルベカラズ

形式

(一) 改正ヲ要スベキ点左ノ如シ

○人車輪ヲ四一式山砲ノ如キモノニ改ムルコト

現制ノモノハ音響大ナルト不齊地ノ通

過ニ方リ破損多キニ依ル

○ス可及的精度ノ向上ニ努ムルコト

近距離平射ニ於テ特ニ然リトス

○3. 彈藥車ノ形式ヲ改ムルヲ要ス

框ハ不要ナリ 特ニ後車ノ破損多シ

○4. 駐鋤ヲ打込式トスルヲ可トス

土地堅硬ナル場合、狀況急ヲ要スル場

合等ニ於テ屢々其必要ヲ感ジタリ

○々 搖架耳蓋、瓢形環ヲ破損セザル如ク增強スルヲ要ス

○々 駐退液携行ノタンノ容量ニリツル程度ノ容器ヲ必要トス

○々 豫備品中増加ヲ必要トスルモノ尤ノ如シ

割栓、小者ガ類、復坐ばね、安全栓ばね

○々 拉繩切レ易シ工夫ヲ要ス

○々 油罐ノ容量大ナルモノヲ必要トス

○々 彈丸抽出器ヲ必要トス（洗桿ニ附スル如ク）

○々 彈藥箱ハ九七式歩兵砲式ヲ可トス 彈藥

筒乙ヲ採用スル場合ニ於テ特ニ然リ

### 委員所見

九二式歩兵砲ニハ多少ノ缺陷アルコト勿論ナルモ實戰ノ結果ニ徴シ大隊砲トシテ其特性ヲ認めアルモノナルヲ以テ今遽ニ砲種ノ改正ヲ論ズルヨリモ先ヅ之ガ缺陷ノ除去ニ力ヲ用フルノ要アリ

○々 委員會ニ於ケル議題トナリシ大隊砲ト



シテノ九ニ式歩兵砲、九七式歩兵砲ノ利害比  
較ニ関シ考察スルニ一般裝備トシテノ大隊  
砲ハ依然九ニ式歩兵砲ヲ有利トスベレト雖モ  
本作戦間ノ如キ峻峻ナル山地ノ戰鬥ニ  
於テハ臂力ニ依ル搬送ノ容易ヲ主トスル点  
ヨリ見テ九七式歩兵砲ノ裝備モ亦必要  
ナリト思考セラル  
之カ爲増加裝備トシテ之ヲ整備スルコトハ  
必要ナルベシ

ニ速射砲ハ命中精度良好ニシテ銃眼等ニ

對シ制壓ノ效果大ナリ 然レドモ破壊威力ニ  
於テ十分ナラズ

速射砲中改正ヲ要スベキ点左ノ如シ

- 1. 砲架齒弧ハ反起ヲ生ジ易シ
- 2. 轆桿及同接續具ハ脆弱ナリ
- 3. 彈藥車ノ車輪ハ增強ヲ必要トス
- 4. 防危板ノ取付部特ニ下部ノ蝶「ナット」ハ行  
軍間弛ミ易シ 取付ノ方法ニ関シ研究ノ余  
地アリ
- 5. 車輪ハ聯隊砲式ニ改ムルヲ要ス

銃器

一九二式機関銃

(一)眼鏡照準具ハ有利ニシテ特ニ九六式眼鏡照準具ヲ可トス

理由

- 一、九六式眼鏡照準具ノ九三、九四式ニ比シ有利トスル点尤ノ如シ
- 二、敵前ニ於ケル操作容易ナリ
- 三、倍率大ニシテ目標ノ發見容易ナリ

三、重量輕ク且射撃間及小移動間裝

着シタル儘之ヲ行ヒ得ルノ利アリ

六、遮蔽ノ度ハ五十歩百歩ナリ本作戦間

ニ於テ陣地進入後射撃間敵彈ノタメ

損傷ヲ受ケタルコトハ二種照準具ノ何レ

ヲ有スルモノニ有リテモ稀ニシテ死傷ノ大部

ハ進入時、変換時等ナリシニヨリテモ之ヲ

知り得

承女員所見

右意見ニ對シ同意ヲ表ス



但各種地形ノ戰況ヲ考フルトキハ潛望ノ利  
益ヲ收ムルノ必要ナルコトアルニ鑑ミ別ニ之ニ  
附屬シ得ル潛望式反射鏡ノ研究ヲ續行  
スルノ必要アリト認ム

(二) 彈藥箱ノ收容彈數ヲ減ジ其重量ヲ輕  
減シ且銃側ニハ常ニ數連ノ彈藥ヲ銃ト  
共ニ携行シ得ル如ク背負袋式ノ彈藥囊ヲ  
必要トス

### 理由

困難ナル地形殊ニ峻峻ナル山地ノ攻撃ニ方  
リテハ長距離臂力搬送ヲナシ山頂ニ陣地進  
入ヲナサザルベカラザル場合少カラス 追撃戰斗  
ニ於テ特ニ然リ 此ノ如キ場合銃ハ進入スルモ彈  
藥ノ搬送間ニ合ハズ 敵ヲ逸シタル例尠カラス

### 委員所見

右意見見ニハ概テ同意ナリ 但一箱ノ彈藥ヲ  
幾何ニスベキヤ又彈藥囊ヲ如何ナル形式トスベ  
キヤニ關シテハ將來研究ヲ要スルモノト認ム

(三) 最近補給セラルル重機関銃ニ在リテハ尤ノ如キ故障續出ス

活塞隆鼻部ノ扛起、活塞桿ノ屈曲、圓筒ノ門子結合部ノ折損、圓筒包底面ノ欠損、撃撃莖尖頭ノ折損、尾筒門子室兩側又ハ上面ノ膨脹等以上ノ如キ損傷多キハ調質及仕上げノ不良ニ基因スルモノト認めラルル。特に部品ノ結合ニ方リ從來ニ比シ甚ダシク摺り合セニ時間ヲ要スル点ヨリ考へ製造上ノ公差大トナレルニハアラガルヤト考ヘラル

### 永女員所見

原因果シテ何レニアルヤヲ明ニシ得ズト雖若シ戦時大量補給ヲ要スル爲製作上ニ欠陥アリトセバ將來大イニ考慮スベキ点ナリト信ズ

(四) 重機ノ器具箱ニ左ノ豫備品ヲ必要トス

活塞 ニヲ新ニ收容ス  
圓筒、撃撃莖ノ数ヲ増加ス

### 永女員所見

研究ヲ要ス

## 二小銃

(一) 一般歩兵用トシテ三八式歩兵銃ハ重量過大ナリ長サヲ短クシ全般ニ重量ノ軽減ヲ必要トス之カ爲精度ハ近距離ニ於テ良好ナレバ可ナリ但狙撃銃ハ例外トス

## 理由

個人員携量ノ軽減、採用ヲ便ナラシムル爲ナリ一般小銃手ノ火力ハ多クヲ期待スルノ

要ナク之アリトスルモ近距離ニテ可ナルヲ以テ精度ハ近距離ニ要求スルノミ之ニ反シ狙撃銃ハ現制ノモノヨリ更ニ精度ヲ向上スルノ要アリ

## 承女員所見

右意見ニ同意ス

(二) 自衛用トシテ裝備セララルル小銃ハ騎銃ヲ可トス

## 理由

三八式歩兵銃ハ携帶ニ不便ナルヲ以テナリ

委員所見

右意見ニ同意ナリ 第一項ノ如ク一般小銃ヲ改造セバ自然ニ解決セラルル問題ナリ

(三) 小銃ノ携帶豫備品ハ個人ニ裝備スルノ必要ナク大隊彈藥班ニ於テ携行スレバ可ナリ



理由

個人携行ノ必要ヲ認めザレバナリ

三三〇年式銃劍ノ型式ヲ刺突ニ適スル如ク改ム

ルヲ要ス

理由

現制ノ銃劍ハ其形狀  形ニシテ且其抗力弱キタメ刺突ニ方リ屈曲又ハ切り損ズルモノ多シ  形トシ且抗力ヲ增強スルヲ要ス

委員所見

一應研究ノ要アリト認ム 特ニ斬撃ニ適スル如キ刀形トシタル点ハニ考ヲ要スルガ如シ

四 特校用軍刀外装ヲ今一層堅牢ナラシムルヲ

要ス

理由

戦闘間ハ破損多ケレバナリ

委員所見

研究ノ要アリ

### 五重擲彈筒

(一)重擲彈筒ノ射程ニ就テ左ノ兩意見アリ

ノ最大射程千米ヲ必要トスルモノ

ス、最大射程ハ現制ノモノニテ十分ナルヲ以テ最

小射程ヲ五十米乃至百米迄短縮スル  
ヲ要ストナスモノ

委員所見

右兩意見ノ理由ヲ調査スルニ前者ハ重  
擲本來ノ任務ヲ考フルコトナク本作戦ニ  
於テ中隊カ攻撃間歩兵砲、重機等ノ  
火力不足ニシテ七、八百米以上ノ距離ヨリスル  
敵ノ側防機関銃ヲ制壓スル為必要ナ  
リトノ体験ヨリ出デタルモノニシテ中隊砲  
ノ必要ヲ論ズルニ歸スルガ如ク後者ハ突



撃手ニ際シ二百米以内ニ近接シテ突入点ヲ  
完全ニ制壓シ突入ノ動機ヲ作爲スル爲  
現制ノモノニテハ彈丸反轉又ハ横轉ノ爲  
不發多キヲ理由トスルモノナリ

兩者ノ思想ニ取入レ近極限ヲ百米乃  
至五十米ニ短縮シ最大射程ヲ千米迄  
延伸シタリトスルモ五、六百米以上ノ距離ニア  
ル目標ニ對スル重擲彈筒ノ射撃ハ命  
中ヲ期シ難ク徒ニ彈藥ヲ浪費スルニ過  
ギザルヲ以テ前者ノ要求ハ之ヲ他ノ手段ニ依

リテ充足スル事トシ重擲彈筒ハ專ラ  
後者ノ要求ヲ充足スルニ徹底スルヲ適當  
ト認ム

(二) 重擲彈筒ニハ照準具ヲ必要トセス

### 理由

三四百米ノ距離ニアル目標ニ對シテハ筒手ハ之ニ  
適當ニ射撃ヲ導キ得ルノ自信ヲ有スルニ至レリ  
本兵器ノ特性ハ其簡單ニシテ手加減ヲ以テ  
輕易ニ射撃ヲ實施シ得ル点ナルヲ以テ成ル  
べく不要ノモノヲ附セザルヲ要トス

永女員所見

右立見凡ニ同意ス

(三) 柄桿及駐板ノ抗力ヲ増強スルヲ要ス之ガ爲  
柄桿ノ肉厚ヲ今少シク増大シ且柄桿ト駐  
板ノ接着部ノ駐螺ヲ前後左右四本トスル  
ヲ可トス

理由

坚硬ナル土地特ニ岩石地ニ在リテ戦斗セル結  
果駐板ニ枕ヲ併用スルモ柄桿ニ對スル衝撃手  
強ク長時日間ニハ柄桿ノ縦溝開キ機能ヲ

害スルニ至リ又柄桿ト駐板トノ接着緩  
解スルニ至ル

永女員所見

研究ノ要アリ

(四) 豫備品トシテ轉輪ノ駐螺ヲ増加スルノ要アリ

理由

駐螺ノ落失多クケレバナリ

永女員所見

駐螺ハ平時ニ在リテモ落失シ易キモノナリ  
故ニ別ノ形式ニ改ムルヲ可トセン

測機

一九三式野戰輕測遠機ハ潛望式トナスヲ可トス

理由

本測遠機ハ水平基線ニシテ而モ接眼部斜上方ニアルヲ以テ如何ニ注意シテ其位置ヲ定メ測距ヲナサントスルモ特異ノ形狀ヲ呈シ敵ノ發見スル所トナル爲測距手ノ損傷比較的多シ近距離ニ於ケル場合特ニ然リ

承女員所見

歩兵砲用トシテハ觀測所通常敵ニ近キヲ以テ右意見ニ関シ目下研究中ノ潛望式ヲ促進スルノ要アリ

ニ五十種觀測鏡輕内木部ノ木質ヲ十分吟味シ吸濕性ヲ無クスルノ要アリ

理由

木部變形膨脹シテ鏡ヲ輕ヨリ出シ得ザルニ至ルモノアリ之カタメ強テ之ヲ出サントシテ鏡頭部ヲ曲ゲタルモノ少カラズ

承女員所見

研究ヲ要ス

彈藥

九二式歩兵砲彈藥ハ彈藥筒乙ヲ可トス

理由

現制ノ螺式藥莖ハ戰場ニ於テ裝藥ノ  
編合ヲ行フ際螺脱シ得ザルコト屢々ナリ  
之ニ反シ彈藥筒乙ハ編合極メテ容易ニシ  
テ有利ナリ但此ノ彈藥ヲ使用スルトキハ彈  
藥箱ノ制式ヲ改ムルヲ要ス

承女員所見

右立意見ニ同意ス

彈藥箱ハ三發入トシ九七式歩兵砲ノ彈

藥箱ト同一形式ノモノヲ採用スルヲ可トス

九二式歩兵砲ノ裝藥号ハ更ニ弱裝藥トシ  
テ五号裝藥ヲ設クルヲ要ス

理由

九二式歩兵砲ノ特徴トスル所ハ平曲兩様ノ射  
撃ヲナシ得ルニアリ而シテ之ヲ本事業ノ経  
験ニ徴スルニ曲射撃ノ教育不徹底ナ



リシ爲之ヲ用ヒザリシ場合 勘カラズ 事変後  
戦場ニ於テ之ガ教育ヲ行ヒ 現在ニテハ十  
分ニ利用シ得ルニ至レリ 然レ共四号装薬  
ノ近極限ハ尚稍、遠キニ過グル感アルヲ以テ  
更ニ弱キ五号装薬ヲ加フルヲ可トス

忝女員所見

右意見ハ大ニ考慮ヲ要スル点ナリ 然レ  
共一方装薬号ノ増加ハ製造上ニモ手数ヲ  
要スルニ至ルベキヲ以テ用度少キ一号装薬ハ薬  
囊ヲ「セルロイド」製トシテ若干別ニ携行シ

薬筒内ノ装薬ハ現在ノ二号乃至四号ニ  
更ニ五号ヲ加ヘタル四種トスルヲ可トスベシ  
三砲種ニ應ズル使用彈薬一覽表ヲ作製シ之  
ヲ戦時補給廠、兵器部、輜重隊等ニ交  
付スルヲ要ス 又信管ハ常ニ彈体ト同一ノ箱  
ニ收容スルカ 已ムヲ得ザレバ信管箱ノ表記ハ彈  
種ト同一ノ名稱ヲ附スルヲ要ス

理由

今次事変ニ於テ砲種ト使用彈薬トノ関  
係ヲ十分知ラザリシ爲 部隊ノ有スル砲種ノ



彈藥ト異ナル彈藥ヲ補給シタルコトアリ又  
異ナル信管ヲ補給シタル例アリ  
又第二十七師團カ漢口作戰開始後ニ至ルモ尚  
拘ラズ師團カ漢口作戰開始後ニ至ルモ尚  
本砲ノ彈藥カ南京ニ在リテ其所在スラ判  
明セズ爲ニ作戰上甚ダシキ支障ヲ來セル  
カ如キ例アリ

忝女員所見

右意見ニ全然同意ナリ  
本件ニ關シテハ既ニ當局ニ於テ研究中

ノモノナリト信ズルモ之カ實現ノ速カナラニコ  
トヲ要望ス

四九式重機関銃ト小銃ハ輕機彈藥トハ融通  
性ヲ有セシムル事必要ナリ

理由

補給ヲ容易ナラシムルタメ必要ナリ

忝女員所見

重機彈藥ト其他ノ彈藥ハ彈藥箱ノ形  
式ヲ異ニセバ混淆ノタメ誤テ兵器ト異ナル彈  
藥ヲ補給スルガ如キ憂ナク且重機彈藥ノ補

給率ヲ大ニシ置カバ小銃、輕機ノ彈藥ヲ融  
通使用セザルベカラザルガ如キ事稀ナルベキヲ以  
テ絶對必要トハ考ヘザルモ成シ得レバ共通ニ近  
キモノトナスノ要アルベシ  
但之ガ爲重機ノ初速ヲ甚ダシク低下スルコト  
ハ適當ナラズ

本作戰間ニ於テモ重機ヲ以テ千五百乃至二千  
米附近ノ射撃ヲ必要トセシ例數カラザレバナリ

### 器材

一九二式微光燈ハ電池濕潤ノタメ使用命數少  
シ將來無電池式トスルカ或ハ電池ノ防濕ヲ完  
全ナラシムルヲ要ス

### 理由

今次作戰ハ雨季ニアラザリシモ數日ノ雨  
ニテ殆ド使用シ得ザルニ至レリ

### 忝員所見

研究ヲ要ス

第六、近接戰鬥兵器裝備改正ニ関ス  
ル意見

一司令部用指揮具ヲ速ニ整備スルヲ要ス

理由

現在一部ノ器械ハ攜帶器械トシテ整備セラレアルモ何レモ實用的ナラザルモノ多ク特ニ砲隊鏡ノ如キハ是非共戰鬥司令所用トシテ必要ナルニ拘ラス現在整備セラレアラス

委員所見

右意見ニ同意ス 研究ノ上速ニ整備ヲ必要トセン

一各本部用指揮具モ亦前項意見ノ如ク速ニ整備スルコト必要ナリ 特ニ望遠鏡測角器ヲ必要トス

理由

概テ第一項ニ全ジ 但望遠測角器ハ聯大隊長ガ敵ノ側防火器ノ位置ヲ正確ニ發見シ之ヲ側近砲ヲ以テ破壊セシムル爲テ必要ナリ

委員所見

右意見ニ同意ス

但望遠測角器ハ本戰鬥間ノ經驗ニ鑑ミ  
其必要ヲ痛感スル處ナルモ砲隊鏡トノ利害  
及之ヲ裝備スルトスルモ本部、歩兵砲隊ノ何  
レヲ可トスルヤニ関シテハ研究ヲ要ス

三歩兵砲ハ凡テ輓、馱兼用トナスヲ絶對必要ト  
ス而シテ輓ハ更ニ輕量トスルヲ可トス

### 理由

歩兵ハ地形ノ如何ヲ問ハズ 戰鬥ヲ遂行  
シ得ルヲ以テ其本領トナス

之ガ爲一時的ニハ數名駕ノ火砲ニ在リテモ分  
解臂力搬送ニ據リ得ベシト雖行動相當長  
時日ニ亘ル場合ニ在リテハ馱載ヲ絶對必要トス  
此ノ目的ノ爲全部馱載ト爲シ得レバ論ナキモ  
馬匹必ズシモ之ヲ許サザルノミナラス道路ニ據リ  
得ル場合ハ不經濟ナルヲ以テ必要ニ應ジ砲隊  
馬匹全部ヲ用ヒテ馱載シ彈藥ノ不足ハ彈  
藥班又ハ馱馬輜重ノ一部ヲ分屬スルノ方法  
ヲ採ルヲ可トス 之ガ爲馬具ハ輓馱兼用ノモノ  
トスルノ必要アリ

承女員所見

右意見ニ同意ス 編制ト共ニ装備ノ研  
究ヲ必要トセン

四九三式歩兵砲ヲ馱載トスル場合一彈藥馱馬ニ馱  
載スル彈藥數ハ日本馬ニ在リテハ十五六發、  
支那馬ニ在リテハ十發位ヲ限度トスルガ如シ

理由

山地戰ニ於テ行動困難ナル小径ヲ跋渉  
シタル經驗ニ依ル

承女員所見

馱鞍ノ重量輕減ト共ニ研究ノ要アリ  
五重機ニ曳光實包ヲ裝備スルコト必要ナリ

理由

本作戰間地形上彈著觀測多クノ場合不  
可能ニシテ射撃效果發揚上困難ヲ感ジタリ  
其携行比率ハ普通彈ノ十五分ノ一程度ニテ  
可ナリ

承女員所見



全然同意ヲ表ス 輕機等ニ在リテモ同様  
必要ナルベシ 之が爲 曳光實包ノ保存年限ノ  
探求、之ニ伴フ 戦用彈藥ノ整備法、戦時携行  
比率等ニ就テハ 對空射撃ノ場合ヲモ併セ考  
慮シ研究ヲ要ス

六速射砲ヲ對自動火器兵器トシテ使用スル爲  
ニハ一般步兵砲ト同様ノ觀測具ヲ整備スル  
ヲ要ス

### 理由

對戦車射撃用火砲トシテノ觀測具ニテ到底

目的ヲ達成スルコト不可能ナレバナリ

### 委員所見

實戰ノ經驗ニ鑑ミ其必要ヲ感ズルヲ以テ  
目下研究中ノ速射砲用指揮具ハ一部改正  
ノ必要アリト認ム

七步兵中隊ニ重機ヲ必要トス 而シテ之カ使用  
兵器ハ現制九二式重機ヨリモ更ニ輕量ナラシムル  
ヲ要ス

### 理由

步兵中隊ノ戦力ヲ強化スル爲重機ハ常ニ必

要ナリ然レドモ現制九一式重機ハ重キニ過ギ  
今次作戦地ノ如ク困難ナル地形ニ於テハ配属  
重機ガ屢第一線進出ノ時機ヲ失シタル事實  
ニ徴スルモ中隊重機ハ更ニ輕量ナルモノヲ必要ト  
ス  
承女員所見

右立見ニ同意ス  
ハ各種器杖ヲ綜合整備スルノ要アリ

理由

例ヘバ眼鏡類ニシテ兵器ニ属スルモノト器杖

ニ属スルモノトノ兩様アルガ如ク複雑ニシテ  
整理上有利ナラス

承女員所見

兵器表ト携帶器杖表トニ分類記載セラ  
レアルモノノ中指揮ニ必要ナル器杖ノ如キハ  
之ヲ纏メテ指揮具トスルヲ便トスベシ

九手榴彈ハ發射發煙筒式ノモノヲ研究スルヲ要ス

理由

手投げハ距離短ク攻撃手用トシテ不十分ナル  
ヲ以テナリ

委員所見

研究ノ要アリ

第七、將來ニ對シテ意見

戰爭長期ニ亘ルコトヲ豫想セラルル將來戰ニ於テハ戰爭間各種奇襲的兵器ヲ研究製作シ之ヲ戰場ニ送リテ有效適切ニ使用シ以テ戰鬥ヲ有利ニ進展セシムルノ著意ヲ必要トス。之カ爲ニハ第一線部隊ヲシテ常ニ創意工夫ヲ廻ラシ各

種ノ手段ヲ講ジテ敵ヲ急襲シ特ニ新ニ現出シ米ル兵器ハ進ニテ之ヲ利用セントスルノ企圖バヲ把持セシムルト共ニ如何ニシテ之等新兵器ヲ第一線部隊ニ使用セシムルカニ関シ十分研究シ置クコト緊要ナリ

今次戰場ニ携行セシ兵器ノ作戰地ノ地形並ニ戰鬥ノ性質ニ合致セザリシモノナキニアラザリシモ全般的ニ觀察シテ其效果ヲ十分ニ發揮シ得タリトハ考ヘラレザルモノアリ。今之カ原因ヲ探求シ將來ノ爲ノ對策ヲ述ブレバ尤ノ如シ

一、第一線各部隊長ノ固有裝備外兵器ニ對スル  
關心ヲ十分ナラシムルヲ要ス

使用部隊中某部隊ノ隊長ハ進ンデ新兵器ノ  
利用ヲ部下部隊ニ要求シ或ハ自ラ之ヲ利用  
スル戰鬥ノ方法ヲ案出シテ部下ヲ指導スル等  
ノ著意十分ニシテ使用ノ結果モ亦見ルベキモノ  
アリ 然ルニ某隊ニ於テハ固有裝備以外ノ兵  
器ニ對シテハ全然無關心ニシテ交付スルモ殆ンド  
之ヲ使用セザリシモノアリ

上記ノ点ニ著意シ平時ノ幹部教育ニ於テ

戰場教育特ニ新ニ現出スル兵器ヲ巧ニ利用  
シテ戰鬥ヲ遂行スルノ素地ヲ與ヘ置クノ要アリ  
又一方兵器ハ事前ノ研究ヲ十分ニシ機能ニ関  
シテハ絶對自信アルモノヲ戰場ニ送ルコト特ニ緊  
要ナリ

ニ戰場ニ送りタル新兵器ハ各隊競フテ之カ支給  
ヲ希望スルニ至ラシメザンバウラズ

平素訓練シアラザル兵器ハ戰場ニ於ケル第一回  
ノ使用ニ際シ成功セシモノハ極度ニ推擧セラレ失  
敗セシモノハ爾後邪魔物扱ヒサルルハ當然ノコト  
也



ナリ此点ヨリ考へ始メテ戦場ニ新ナル兵器ヲ携行  
スル場合ニ在リテハ基幹部隊ヲ編成シテ之ニ十  
分ナル教育ヲ施シ某隊ニ配属シテ使用セシムルヲ  
必要トス

基幹部隊ノ編成ハ内地ニ於テ實施學校ノ人  
員等ヲ以テスルヲ可トスト雖モ己ムヲ得ザレバ戦  
場補充部隊等ヲ以テ編成スルモ可ナリ

今回ノ如ク直接第一線部隊ニ取扱法ヲ教  
育シ直ニ戦斗ニ實用セシメテ良果ヲ收メント  
スルハ過望ニ属スルモノト言ヒ得ベシ

三第一線部隊が固有装備ト同様ニ使用シ  
得ルニ至ル迄ハ特別ノ運搬機関ヲ附属セシムル  
ヲ要ス

常ニ不足勝ナル隊属輸送機関ヲ以テ之等新  
兵器ヲ輸送セシメントスルトキハ適時適切ニ之  
ヲ第一線部隊ニ交付スルコト困難ナリ

指導者カ特別ノ輸送機関ヲ有セザリシ為  
之ヲ隊属輸送機関ニ托シタルニ彈藥糧秣  
等一般ノ補給スラ常ニ不足勝ナリシ結果  
固有装備以外ノ兵器彈藥、等ハ常ニ後



廻ミトナリニ全般ノ戦況地形ヨリ考ヘ今  
 此兵器ヲ使用セバ非常ニ有利ナラント思  
 惟スル時機ニ於テ該兵器ハ後方集積地ニ  
 残置セラレアリ如何トモナシ難キ状況屢々現出  
 セリ  
 部隊全般ニ必要性ヲ痛感スルニ至ラバ一般  
 兵器彈藥ノ補給ト同様ニ取扱<sup>テトナリ</sup>自然ニ  
 之ガ前送<sup>シ</sup>機ヲ失スルコトナク行ハルニ至ルベ  
 シ

附表第一

承委員、同附属人名並ニ任務分擔表

長	
---	--

金森又樹 附屬

〇〇兵器 附屬

海軍 附屬

東島又五郎

由安又樹 附屬

率 附屬

天運 附屬

兵器彈藥ノ補給ト同様ニ取扱<sup>カトナリ</sup>自然ニ  
 之ガ前送ノ機ヲ失スルコトナク行ハルニ至ルベ  
 シ

附表第一

委員長、同附属人名並ニ任務分擔表

委員長、同附属人名並ニ任務分擔表	長 全般ノ指導並ニ統轄	庶務 銃器、近接戰鬥、通信照明 器械並ニ測機ニ関スル指導 並ニ調査事項	輸送業務 火砲彈丸爆藥、〇〇兵器ニ 関スル指導並ニ調査事項	宰領掛 由良大尉附属	宰領掛助手 〇〇兵器ニ関スル指導 金森大尉附属	重信中佐附属 火砲、銃器指導助手
	重信 中佐	由良 大尉	金森 大尉	天野 准尉	東裏 火工曹長	河野 軍曹

金森大極  
 火器學及操典、〇〇兵器  
 編纂業著  
 並に機運等著  
 器機運等撰著、國公試考  
 槍器、並に機運等撰著、國公試考  
 重訂中誌  
 全編、試考並に機運等撰著  
 永文員國樹編入、並に機運等撰著、國公試考  
 附録一

附表第二  
 實用ニ供スベキ近接戰鬥兵器性能實用資料表

品目	員数	性能	實用資料		摘要	
			目的	重量小計 概算(斤)		
試製小撃砲	四	口径 八一耗 最大射程 四〇〇米強 全備重量 約二五斤	突撃等支援 、效果ナラ 判定シ且 此種又砲 一般ノ研 究資料 ヲボム	第一線中 隊ニテ編成 シ重機、 如ク運用セ シム少クモ 二門ヲ集 結使用ス ルモノトス	約 一五〇〇	
榴彈	四〇〇	有翼彈ヲ使 用ス	防禦力、 ミナズ攻 撃力ヲ増 加セルコト、 運動上ノ負 担トノ利害	中隊ニ 銃ヲ編成 セシメ中隊 重機ノ如ク 運用セシム	約 一五〇〇	
試製 圓筒防楯 眼鏡付九 子云輕核裝 筒	一六	圓筒形防 楯ヲ轉動体 トナシ尚平 板防楯ヲ有 シ之ニ輕機 ヲ装着セル			約 一五〇〇	実包八肩 裁装セル新 製品トス

試製 輕量	試製 九八式柄付 手榴彈	改修 三八式歩兵銃
甲		
四〇〇	一〇〇〇	一〇〇
攻撃用トシ テ特ニ投擲 距離ヲ増大 セントスルモノ ニシテ	重量五三〇瓦 炸藥量八五瓦 曳火秒時 約四秒	三八式歩兵 銃ノ銃身長 ヲ五折短縮 セルモノニシテ 反撞稍大ニ モ命中精度 等ニ大ナル影 響ナク敵 ニ對スル白兵 使用ニ便ナリ
各種手榴 彈ノ点火 装置、重 量、形状、 彈丸效力 等決定、 資料ヲ水	各種手榴 彈ノ点火 装置、重 量、形状、 彈丸效力 等決定、 資料ヲ水	採用(特ニ 自決シテ)ヲ 容易ナラシ ムル目的ヲ以 テ銃身ヲ 短縮セント スル資料 ヲ水ム
各種手榴 彈ヲ組合 セ分配使 用セシメ特 ニ点火装置 置、携行及 投擲ノ便否 並投擲距離	各種手榴 彈ヲ組合 セ分配使 用セシメ特 ニ点火装置 置、携行及 投擲ノ便否 並投擲距離	聯隊内各 中隊ニ若干 ヲ分配シ特 ニ射撃又 ハ劍術ニ優 秀ナル小銃 兵ニ使用セ シムルモノトス
八三〇		約 八〇〇

49

十四年式 拳銃實包	機関短銃	三八式實包
三〇〇〇	六	約 八〇〇
重量約三五 五〇〇米ヲ防 寒服着用ノ 兵ヲ殺傷ス	拳銃実包 五〇米入ノ 彈倉ヲ以テ 連發シ得ル モノニシテ 重量約三五 五〇〇米ヲ防 寒服着用ノ 兵ヲ殺傷ス	モノニシテ敵 前至近ニ進 出シ其威力ヲ 發揮スルニ適 防楯ノ全重 量約三〇瓦 輕機ノ着脱 容易ナリ
撃中ニ敵 ヲ製壓スル ヲ要スルカ如 キ場合ノ價 値ヲ判定ス	実戦及陣 内戦斗ニ 於テ不意 ノ戦死ニ 虞ニ特ニ突 撃中ニ敵 ヲ製壓スル ヲ要スルカ如 キ場合ノ價 値ヲ判定ス	ヲ判定シ 併セテ此 際九八式 輕機ノ性能 ヲ實驗ス
シムルモノトス	分隊ニ一 銃ヲ携行 セシメ携帶 彈藥ヲ約 ニ〇〇米ニ制 限シ上記 目的ニ合ス ル場合ノ外 溢リニ使用 セシムルモノ トス	
	約 五〇	



同 爆薬匣	試製 爆薬投擲機	重擲用 試製發煙筒
ハ コ	ハ	五 コ
最大射程 約二五〇米 (爆薬約四 匣、場合)	方形黄色薬 ヲ投擲スルモノニ シテ側防機能 ノ内迫攻撃 等ヲ支援スル ニ適ス 重量約一六匣	重擲ニテ投擲 スルモノニシテ 射程約三〇〇米 重量 五〇〇瓦 發煙時間 約二分 發煙量 (發射發煙 筒ニ略、全シ)
	實用價值 ヲ判定ス	
	師団工兵ニ テ編成実 用セシム少 クモ二門ヲ 集結使用ス ルモノトス	ホム
	約 一五〇 スルモノトス	
50	補給品ノ 内数ヲ充テ ルモノトス	

手榴彈	試製 發射發煙筒	
乙	一、〇 コ	
四 コ	發煙筒自身 ニテ發射スル モノニシテ 射程約一〇〇米 (依托地質ニ ヨリ増減ス) 重量六七〇瓦 發煙時間約分 發煙量 (小發煙筒ノ 約四分一)	重量各約 三〇〇瓦 甲八九七式、信 管乙八門管 付トシ、曳火秒 時八約四秒ナ リ
	現制發煙 筒及同重 擲發煙彈 トノ利害用 途ヲ判定ス	
	大隊ニ携行 シ適時第 一線中隊ニ 交付使用セ シム 發射發煙 筒ハ特ニ集 結使用シ、鉄 條網ノ發行 破壊等ノ 際、利用ス ルノ核合ヲ	及彈丸效力 ノ大小等、 關係ヲ檢 討ス
	九 二 コ	
	補給品ノ 内数ヲ充 當スルモノト ス	



試製 壕内信号機	試製 重鉄帽		試製 九八式輕防楯	試製 九八式重防楯	試製 重鉄筒銃防楯	試製 戰車半爆彈 (種濃炭)
	乙	甲				
五組	二 ロ	二 ロ	一 ロ ロ	二 ハ	二 ハ	一 ロ ロ
潛望式、輕量 九回光通信 機トス	現形制ソモノニ 厚サニ差ク前 鐵ヲ附シタルモ ノニシテ重量ハ 甲ト異ク、同様 ナリ	厚サニ差ク 重量約一八 五ロロ米ニ於テ 七七粒小銃ノ 直射ニ抗堪シ 得	厚サ 重量約一八 五ロロ米ニ於テ 七七粒小銃ノ 直射ニ抗堪シ 得	厚サ 重量約一八 五ロロ米ニ於テ 七七粒小銃ノ 直射ニ抗堪シ 得	厚サ 重量約一八 五ロロ米ニ於テ 七七粒小銃ノ 直射ニ抗堪シ 得	最有効投擲 距離八三、四米 ナルモ背部等 ニ對シテハ更ニ 遠クヨリ有效ナ リ 重量一、二 成力ニ七粒防楯 鋼板ニ對シテ 約十米ノ破孔 ヲ穿ツ
近接戦斗 ニ於テ特ニ大 中隊間、連 絡手段トシ テノ實用價	重量、効力 型式等決定 ノ資料ヲ ホム	重量、効力 型式等決定 ノ資料ヲ ホム	實用價値 ヲ判定ス	實用價値 ヲ判定ス	實用價値 ヲ判定ス	肉迫攻撃 手段トシテ 實用價値 ヲ判定ス
適宜使用セ シム	其大隊ニ於 テ各種任務 ノ指揮官、 兵ニ分散使 用セシム	其大隊ニ於 テ各種任務 ノ指揮官、 兵ニ分散使 用セシム	區分等決 定ノ資料 ヲホム	區分等決 定ノ資料 ヲホム	區分等決 定ノ資料 ヲホム	多效歩、 工兵部隊ニ 分散交付シ 其實驗ノ 概念ヲホム
	約 ハニ ロ	約 ハニ ロ				一 二 ロ

57

試製 壕内信号機	試製 重鉄帽		試製 九八式輕防楯	試製 九八式重防楯	試製 重鉄筒銃防楯	試製 戰車半爆彈 (種濃炭)
	乙	甲				
五組	二 ロ	二 ロ	一 ロ ロ	二 ハ	二 ハ	一 ロ ロ
潛望式、輕量 九回光通信 機トス	現形制ソモノニ 厚サニ差ク前 鐵ヲ附シタルモ ノニシテ重量ハ 甲ト異ク、同様 ナリ	厚サニ差ク 重量約一八 五ロロ米ニ於テ 七七粒小銃ノ 直射ニ抗堪シ 得	厚サ 重量約一八 五ロロ米ニ於テ 七七粒小銃ノ 直射ニ抗堪シ 得	厚サ 重量約一八 五ロロ米ニ於テ 七七粒小銃ノ 直射ニ抗堪シ 得	厚サ 重量約一八 五ロロ米ニ於テ 七七粒小銃ノ 直射ニ抗堪シ 得	最有効投擲 距離八三、四米 ナルモ背部等 ニ對シテハ更ニ 遠クヨリ有效ナ リ 重量一、二 成力ニ七粒防楯 鋼板ニ對シテ 約十米ノ破孔 ヲ穿ツ
近接戦斗 ニ於テ特ニ大 中隊間、連 絡手段トシ テノ實用價	重量、効力 型式等決定 ノ資料ヲ ホム	重量、効力 型式等決定 ノ資料ヲ ホム	實用價値 ヲ判定ス	實用價値 ヲ判定ス	實用價値 ヲ判定ス	肉迫攻撃 手段トシテ 實用價値 ヲ判定ス
適宜使用セ シム	其大隊ニ於 テ各種任務 ノ指揮官、 兵ニ分散使 用セシム	其大隊ニ於 テ各種任務 ノ指揮官、 兵ニ分散使 用セシム	區分等決 定ノ資料 ヲホム	區分等決 定ノ資料 ヲホム	區分等決 定ノ資料 ヲホム	多效歩、 工兵部隊ニ 分散交付シ 其實驗ノ 概念ヲホム
	約 ハニ ロ	約 ハニ ロ				一 二 ロ

防毒眼鏡 (防曇液付)	手投用 催涙彈	重擲用 催涙彈	
ニロロ	ニロロ	ニロロ	
催涙劑ニ對シテ シテ眼ヲ保護スル 目鏡 ナリ	重擲用大ロロ瓦 手投用大ロロ瓦	重擲用及手 投用催涙彈 ニシテ表面ヲ 強要シ無防 護ノ敵ニ對シ テハ即效的ニ 一時戦斗カラ 奪フモトス	テ有效ナリ 重量 約五ロロ瓦
手投用催 涙彈ト併用 シ直ニ突入 スル爲防曇 ニ代フルノ 面ニ代フルノ		實用價 値ヲ判定ス	
手投用催 涙彈ヲ使 用スル中隊 ニ交付ス		主トシテ 集結使用 セシム	

52

發射あか筒	小反射鏡		試製 地雷探知機
	乙	甲	
セロロ	ニロロ	ニロロ	ニ
發射あか筒 ニシテ現制あか 筒ニ比シ重量 約四分一、毒 量約十五分一 ナルモ敵ニ近ク 投射スルヲ以	發射あか筒 ニ準アルあか筒 ニシテ現制あか 筒ニ比シ重量 約四分一、毒 量約十五分一 ナルモ敵ニ近ク 投射スルヲ以	望鏡トス 甲ハ折疊式 乙ハ天幕トシテ 支柱ヲ利用 セルモノ	地中ニ埋込約 四ロロ米迄セル地 雷ヲ探知スルモ ノニシテ重量約 ニロロ米
實用價値 ヲ判定ス	實用價値 ヲ判定ス	實用價値 ヲ判定ス	實用價値 ヲ判定ス
主トシテ集 結使用セシム	主トシテ集 結使用セシム	最前線分 隊長等ニ 使用セシム	主トシテ工兵 ニ使用セシム
約 三五ロロ			約 四ロロ

重量 概算 約 九 砲	其他	一式 山砲火燭彈	要否ヲ判 定ス
		ニロロ	
		自然性火燭 劑ヲ填実セル モノナリ 重量 七五斤	實用價值 ヲ判定ス
			主トシテ集 結使用セム
			一、五ロロ
			補給品ノ内 數ヲ充當ス ルモノトス

附表第三

第一 砲 第一 砲 第一 砲	第一 砲 第一 砲 第一 砲	第一 砲 第一 砲 第一 砲	第一 砲 第一 砲 第一 砲	第一 砲 第一 砲 第一 砲	第一 砲 第一 砲 第一 砲	第一 砲 第一 砲 第一 砲	第一 砲 第一 砲 第一 砲
-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------

附表第三

近接戦闘資材使用景況一覽表

昭和十三年十月二十七日 近接戦闘資材取扱指導員調製

品目	交付員数	使用ノ概況	資材ノ現況	試製		重擲用催涙彈	發射あか筒	地雷探知機	四一式山砲火焰彈	試製九八式柄付手榴彈	試製戰車手榴彈(彈囊共)
				甲	乙						
眼鏡付九六式輕機關銃	一六	九月下旬以降支駐歩一及同歩ニニ於テ各地ノ戰鬥ニ使用ス 銃ハ輕量且機能確實取扱容易ニテ好評ヲ博シ眼鏡ハ一部ノ量ヲ生シタルモノアルモ一級ニ有效ニ活用セラ	上記部隊ニ使用シ	三、〇〇〇	四、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
三八式銃實包	約八、〇〇〇	九月下旬以降支駐歩ニ之ヲ裝備ス 戰況上使用スル機會ハ比較的多多クモ實用ニシタル場合ニハ相當ノ效力ヲ收メタリ	同	三、〇〇〇	四、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
十四年式拳銃實包	三、〇〇〇	最輕便ニシテ連發ノ威力大ナルタメ各種部隊ニ於テ自衛用トシテ裝備スルコトヲ熱烈ニ希望シアリ	同	四、〇〇〇	四、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
試製機關短銃	六	九月下旬以降支駐歩ニ之ヲ裝備ス 戰況上使用スル機會ハ比較的多多クモ實用ニシタル場合ニハ相當ノ效力ヲ收メタリ	同	四、〇〇〇	四、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
試製輕量手榴彈	甲 四、〇〇〇 乙 四、〇〇〇	九月下旬以降支駐歩一及同歩ニニ於テ各地ノ戰鬥ニ使用ス 携行ニ便ニシテ曳火秒時適當ナル爲有利ナリシモ取扱ニ慣レガリシ爲一部不發ヲ生起セリ	殘彈ナシ	四、〇〇〇	四、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
重擲用催涙彈	二、〇〇〇	九月下旬支駐歩一及歩ニニ交付ス、突撃及逆襲阻止ニ有效ニ利用セリ	同	四、〇〇〇	四、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
發射あか筒	七、〇〇〇	九月下旬支駐歩各聯隊ニ交付セシカ各地ノ戰鬥ニ於テ頗ル有利ニ使用セラレ最モ好評アリ	新ニ七、〇〇〇個武昌野戰瓦斯支廠ニ到着シアリ	四、〇〇〇	四、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
地雷探知機	二	九月下旬以降エ三七ニ交付シタルモ未ダ實用ノ機會ヲ得ズ 重量比較的大ナルヲ携行ニ不便ヲ感ジアリ	依然エ三七ニ供用シアリ	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
四一式山砲火焰彈	二、〇〇〇	運搬ノ關係上再三使用ノ機ヲ逸シ未ダ實用セズ	第三七師団輜重之ヲ携行シアリ	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇〇	二	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
試製九八式柄付手榴彈	一、〇〇〇	十月下旬一部ヲ支駐歩ニニ交付セシム未ダ使用スルニ至ラス	約三、〇〇〇ハ支駐歩ニ之ヲ携行シアリ 殘余ハ九江野戰砲兵廠ニ後送シアリ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	七、〇〇〇	二	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
試製戰車手榴彈	一、〇〇〇	未ダ使用セズ	九江野戰砲兵支廠ニ預置ス 將來軍ニ返納スル筈	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	七、〇〇〇	二	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇



發射あか筒	七〇〇	九月下旬支隊各地ノ戦斗ニ ニ交付セシカ各地ノ戦斗ニ 於テ頗ル有利ニ使用セラレ 最モ好評アリ	九工野戰砲兵廠支 隊ニ七〇〇個武昌野 戰瓦斯支隊ニ到着 セリ
試製地雷探知機	二	九月下旬以降エモニ交付 シアルモ未ダ實用ノ機会ヲ 得ズ 重量比較的大ナルヲ携 行ニ不便ラ感ジアリ	依然エ三七ニ使用シテ リ
四一式山砲火焰彈	二〇〇	運搬ノ關係上再三使用 ノ機ヲ逸シ未ダ實用セズ	第三七師団輜重之ヲ携 行シアリ
試製九八式 柄付手榴彈	一〇〇〇	十月下旬一部ヲ支隊歩 三ニ交付セシム未ダ使用 スルニ至ラス	約三〇〇ハ支隊歩三ニ之ヲ 携行シアリ 残余ハ九工野戰砲兵廠 ニ後送シアリ
試製 戰車手榴彈 (彈囊共)	一約 一〇〇	未ダ使用セズ	九工野戰砲兵支隊ニ 預置ス 將來軍ニ返納スル等
試製小擊砲	四	十月下旬支隊歩三ノ陽 新鎮附近ニ殘置セラレ ルニ際シ本砲ヲ交付セシ モ之ヲ使用スルガ如キ戰 況ニ遭遇セス、爾後師 団主力ニ追及スルニ際シ 辛潭鋪ニ殘置ス 鈴木支隊ハ右ノ内二門ヲ以 テ小迫撃砲小隊ヲ編成シ 陽新鎮一崇陽間ノ戰 斗ニ使用セリ 本砲ハ射程四〇〇米ヲ出テ ガルトノ相當ノ苦心ヲ拂ヒ タルモ、蕪口市ノ攻撃ニ於 テ敵前一二五〇米ヨリ有效 ニ射撃ヲ加ヘ效ヲ奏シタリ	砲二門及屬品ノ大部、 榴彈「三四」ハ辛潭鋪 野戰砲兵支隊ヨリ更 ニ武昌野戰砲兵廠 ニ送付セラレツアリ 又ニ門、榴彈約「一〇〇」 ハ崇陽野戰砲兵支隊 ヨリ武昌支隊ニ後送 セラレアリ
同 榴彈	四〇〇		
試製 重機関銃防楯	二八	十月下旬一部ヲ支隊歩三 ニ交付セシモ使用スルニ至ラス ニテ辛潭鋪ニ殘置ス	重機関銃防楯「一」 重防楯「五」輕防楯「四」 ハ辛潭鋪砲兵支隊ヨ リ陽新ヲ經テ武昌ニ 廻送セラレタリ 残余ハ九工野戰砲兵 支隊ニ預托ス
同 九八式重防楯	二八	同 右	
同 九八式輕防楯	九八	同 右	
手投用催涙彈	二〇〇	同 右	辛潭鋪野戰砲兵 支隊ヨリ陽新ヲ經テ 武昌ニ廻送セラレツアリ
防毒防塵眼鏡	二約 二〇〇	同 右	武昌野戰砲兵支隊ニ 廻送シアリ
試製 發射發煙筒	一〇〇〇	未ダ實用セズ 但シ一部ハ教育指導ヲタメ 使用ス	
空擲用 試製發煙筒	五〇〇	十月中旬辛潭鋪附近 富水敵前渡河ニ方リ使 用スル如ク準備セシモ渡 河當日敵ノ抵抗無カリシ ヲ以テ實用セズ 但若干ハ教育指導ノタメ 使用セリ	二四〇ハ武昌野戰砲 兵廠ニ在リ又約二〇〇 ハエ三七之ヲ携行シアリ



試製 重機関銃防楯	九八式重防楯	九八式輕防楯	手投用催涙彈	防毒防塵眼鏡	發射發煙筒	重擲用 試製發煙筒	試製 重機関		試製壕内信号機	試製圓筒防楯	爆藥投擲機	同 爆藥匣	改修 三八式步兵銃	小反射鏡	
							甲	乙						甲	乙
二八	二八	九八	二〇〇	二〇〇	一〇〇〇	五〇〇	二〇	二〇	五組	一六	八	八〇〇	一〇〇	三〇	三〇
十月下旬一部ヲ支駐歩三ニテ卒潭鋪ニ残置ス	同	同	同	同	未ダ實用セズ 但一部ハ教育指導ヲタメ 使用ス	十月月中旬卒潭鋪附近 富水敵前渡河ニ方リ使 用スル如ク準備セシモ渡 河當日敵ノ抵抗無カリシ ヲ以テ實用セズ 但若干ハ教育指導ヲタメ 使用セリ	未ダ使用セズ	同	同	山地ノ戰鬥並迅速尤機 動的ノ作戰ニハ不要ナルヲ 以テ最初ヨリ後方ハ残置 ス	工兵隊ニハ既ニ多数ヲ 裝備シ其以上増加スルモ運 搬ニ困難ヲ加フルニシテ以テ 最初ヨリ後方ニ残置ス	部隊ハ本銃ノ交付ヲ希 望ニアリシモ戰鬥連統ニテ 手入ノ交換等ノ暇ナカリシ爲 實用不可能ナリシカ目下 交付ノ多廻送中ナリ	未ダ使用セズ	同	同
重機関銃防楯	卒潭鋪野戰砲兵 支廠ヨリ陽新ヲ經テ 武昌ニ廻送セラレツアリ	卒潭鋪野戰砲兵支廠ヨ リ陽新ヲ經テ武昌ニ 廻送セラレタリ	武昌野戰砲兵支廠ニ 廻送シアリ	二四〇ハ武昌野戰砲 兵廠ニ在リ又約二〇〇 ハエニセ之ヲ携行シアリ	九江野戰砲兵廠支 廠ニ預置ス	同	同	同	同	同	同	合肇街野戰砲兵 廠支廠ヨリ武昌野戰 砲兵廠ニ向ヒ廻送中	同	右	

備考  
本表ノ外小迫擊砲榴彈、填砂彈「二〇」、柄付手榴彈、  
填砂彈「二〇」、輕量手榴彈、填砂彈「八〇」ハ取扱指導  
ノ爲全部使用セリ

<p>海關 銀 金</p>	<p>六</p> <p>海關 銀 金</p>	<p>海關 銀 金</p>
<p>海關 銀 金</p>	<p>海關 銀 金</p>	<p>海關 銀 金</p>
<p>海關 銀 金</p>	<p>海關 銀 金</p>	<p>海關 銀 金</p>

宣統三年十一月二十日

制 卷 三

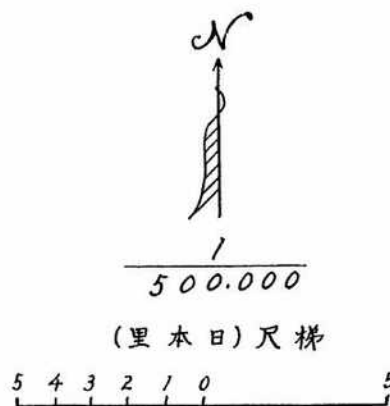
極 秘



# 圖見概過經斗戰=並況狀、地陣敵、形地面方團師七十二第

(日九月一十至日六十月九自)

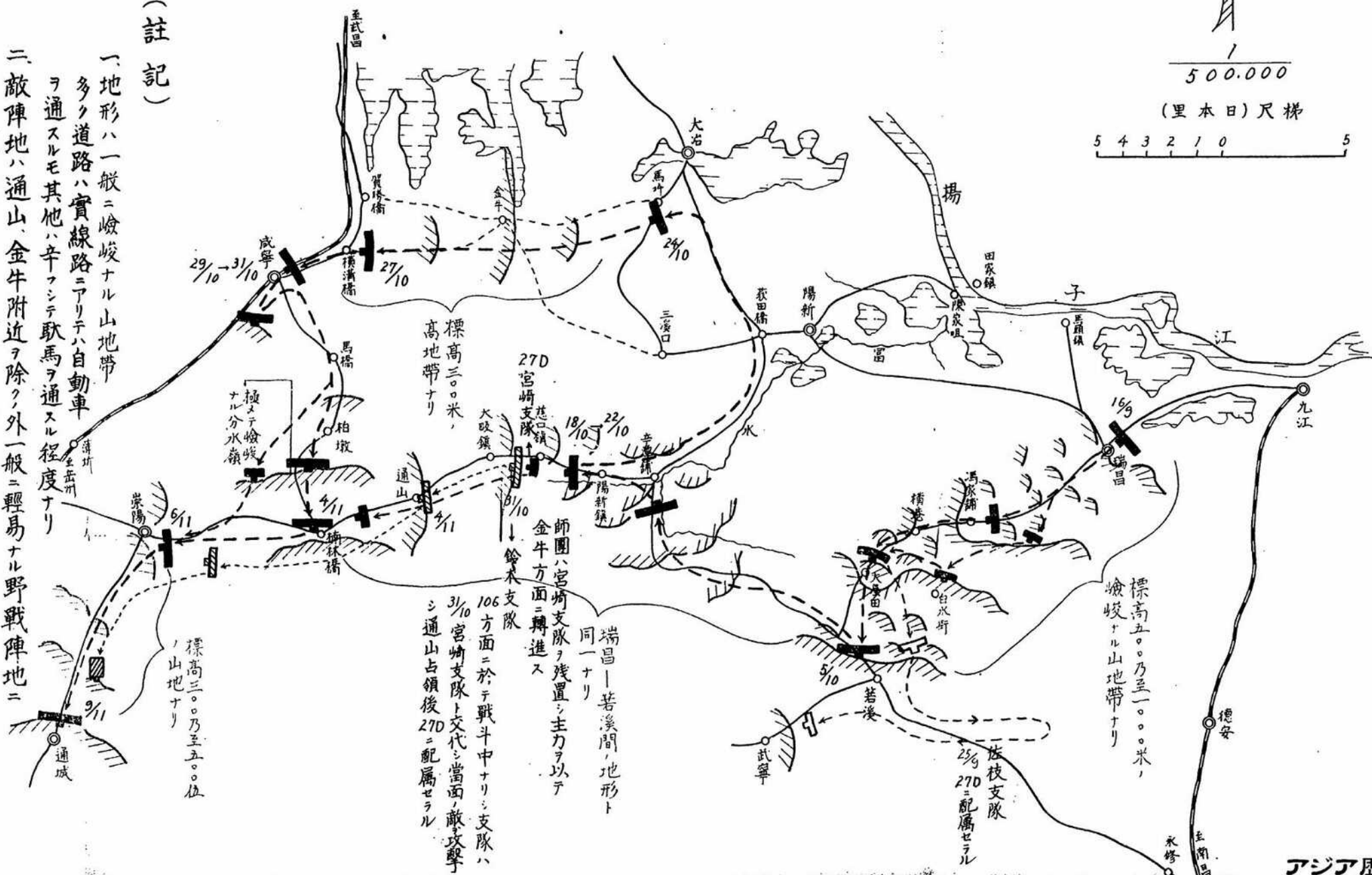
極秘



(註記)

- 一、地形ハ一般ニ峻峻ナル山地帯  
多ク道路ハ實線路ニアリテハ自動車  
ヲ通スルモ其他ハ辛クテ馱馬ヲ通スル程度ナリ
- 二、敵陣地ハ通山、金牛附近ヲ除ク外一般ニ輕易ナル野戰陣地ニ  
シテ道路近傍ニ在リテハ掩蓋Mq及「ト」チカラ有ス
- 三、本圖、隊標別下記、如シ

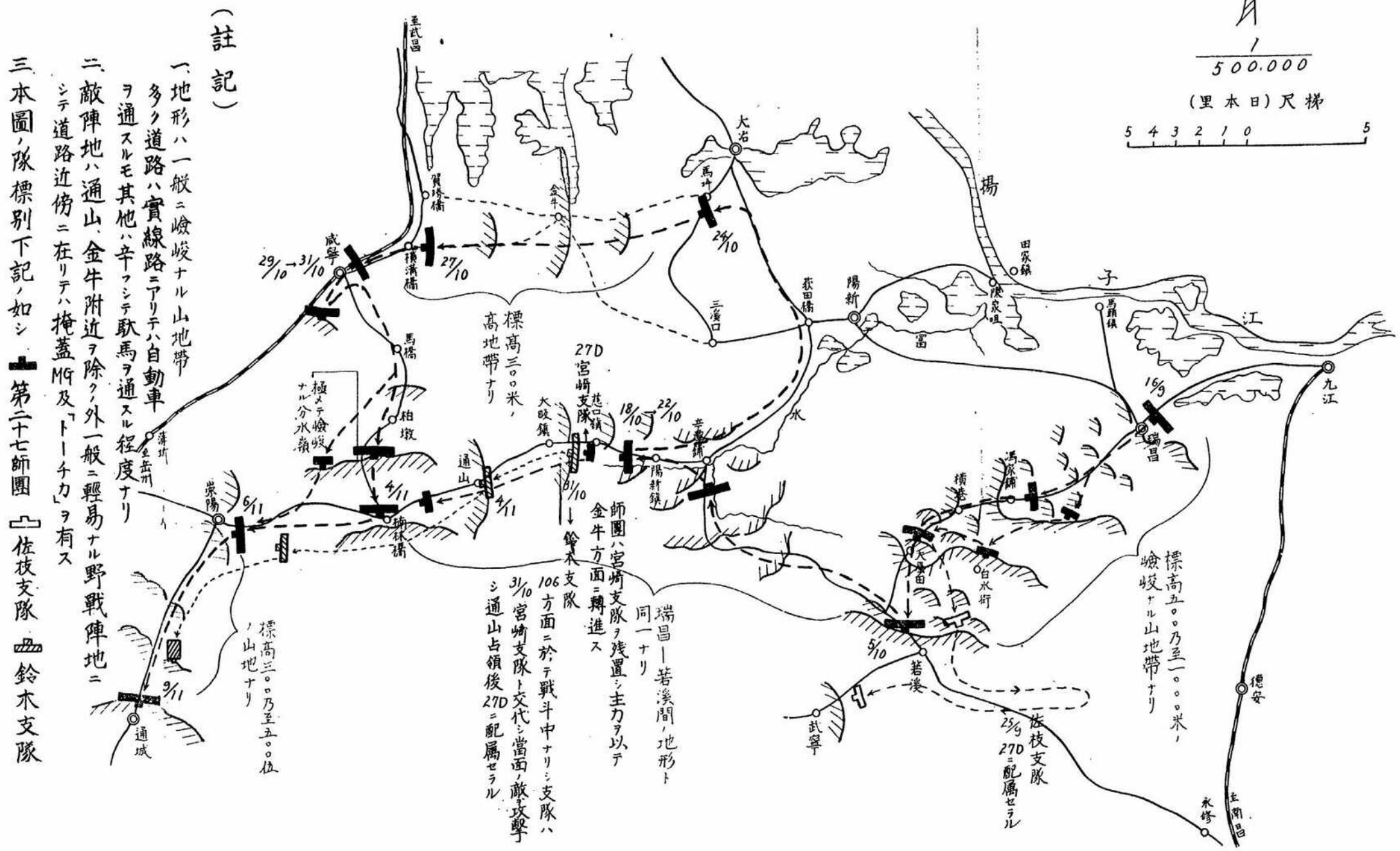
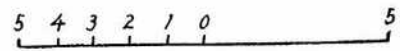
第二十七師團  
 佐枝支隊  
 鈴木支隊





1  
500,000

(里本日)尺梯



(註記)

- 一、地形ハ一般ニ峻峻ナル山地帯  
多ク道路ハ實線路ニアリテハ自動車  
ヲ通スルモ其他ハ辛クテ駄馬ヲ通スル程度ナリ
- 二、敵陣地ハ通山、金牛附近ヲ除ク外一般ニ輕易ナル野戰陣地ニ  
シテ道路近傍ニ在リテハ掩蓋MG及「ト」チカヲ有ス
- 三、本圖ノ隊標別下記ノ如シ  
 ■ 第二十七師團  
 □ 佐枝支隊  
 □ 鈴木支隊

標高三〇〇乃至五〇〇位ノ山地ナリ

標高三〇〇米ノ高地帯ナリ

瑞昌一若溪間ノ地形ト同一ナリ

師團ハ宮崎支隊ヲ残置シ主力ヲ以テ金牛方面ニ轉進ス

鈴木支隊

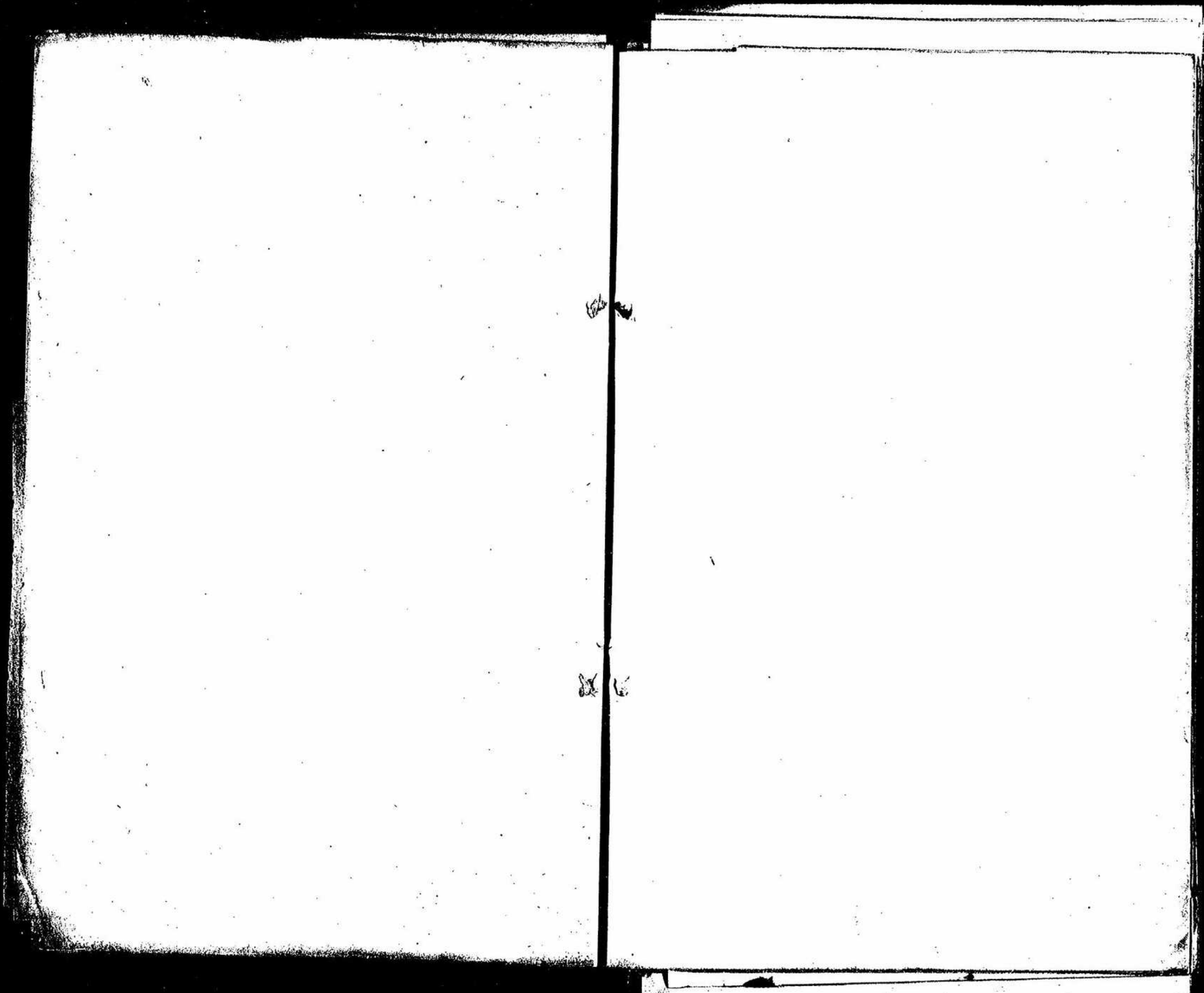
106方面ニ於テ戰鬥中ナリシ支隊ハ3/10宮崎支隊ト交代シ當面ノ敵攻撃ヲシ通山占領後27Dニ配屬セラル

標高五〇〇乃至一〇〇〇米ノ峻峻ナル山地帯ナリ

佐枝支隊 25/10ニ配屬セラル

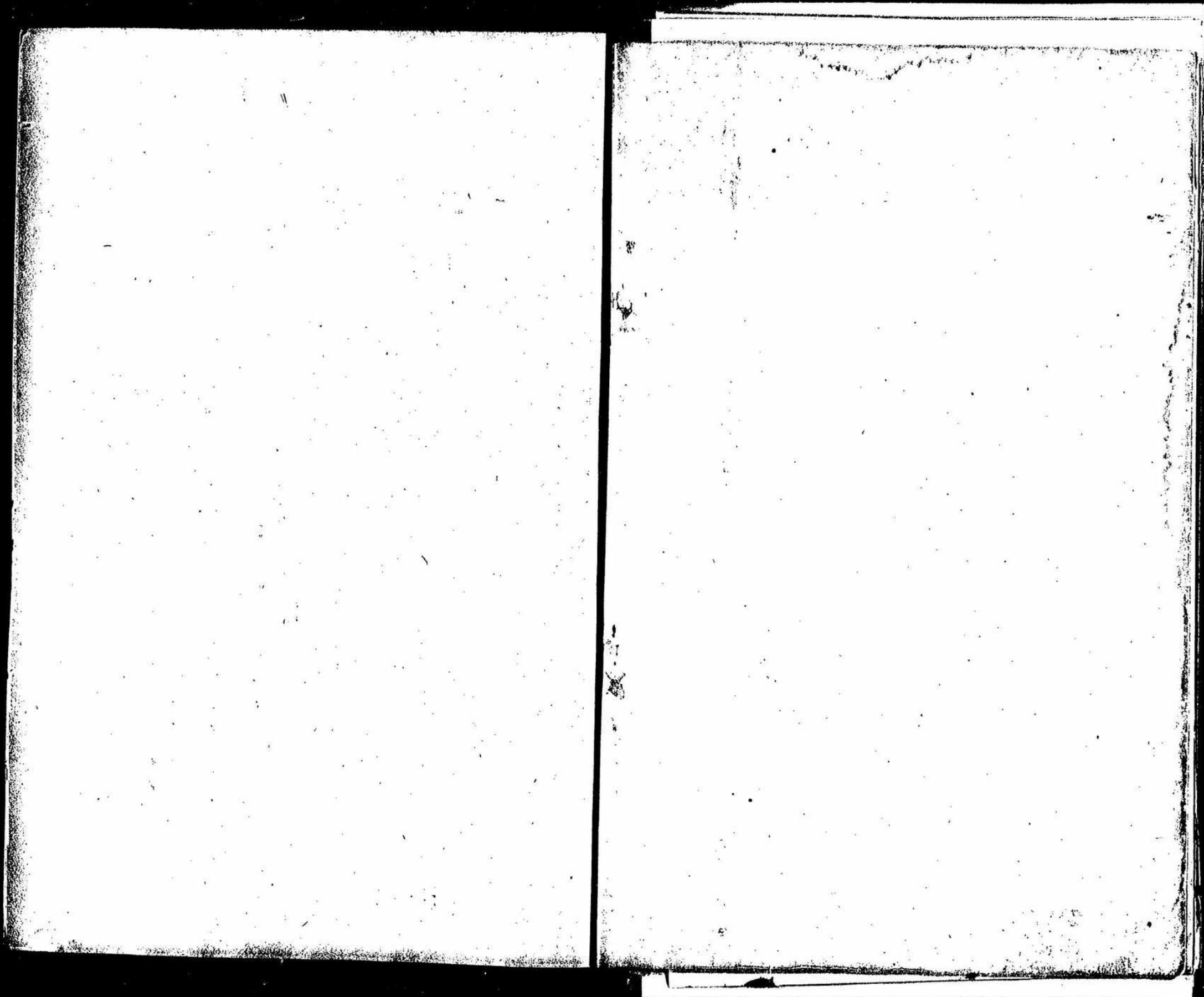


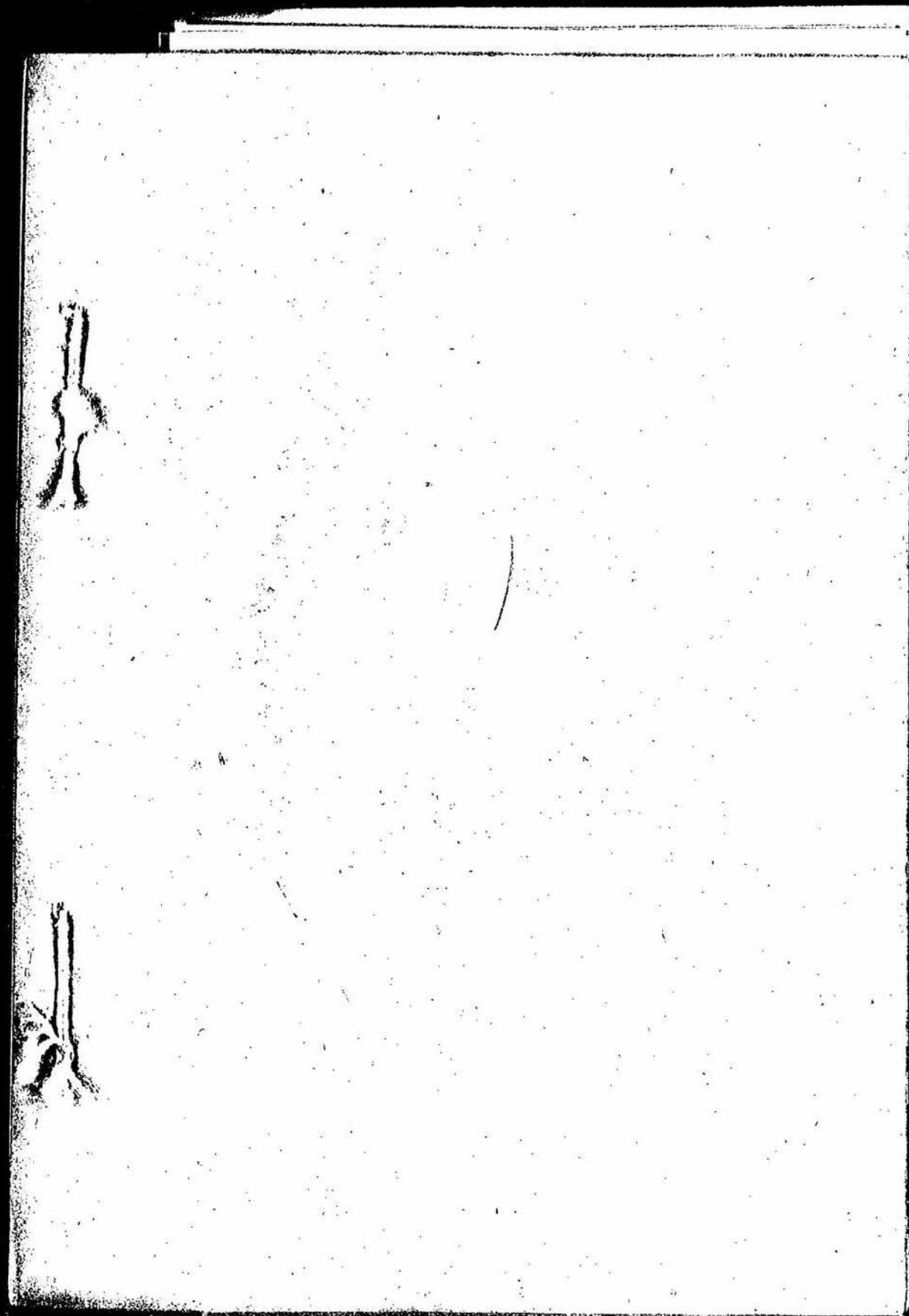
m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



1 : 25







1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10

国立公文書館	
分類	
	返 赤
配架番号	3 A
	14
	40-3

會同席上於ケル兵器部長口演要旨

10/20

15

昭和九年六月十一日  
旭川楷行社

第七師團司令部留守部

国立公文書館	
分類	
配架番号	10-3

めくれず